

はちまにか

2021年2月10日

桜井谷小学校

6年図工通信 第7号

発行者：古田 みちる



～思いを刻む～



2学期の末から取り組み始めた「思い出ボックス」。思い出ボックスと言っていますが、完成するのは木箱（中が少し高級感のある布が貼られている物入れ）です。彫刻刀を使って、自分で考えたデザインをこつこつ彫り進めてきました。日常的に使うことの少ない彫刻刀ですので、使い方・持ち方・ルールは口うるさく伝えてきました。今回は、5種類ある中で「切り出し刀」のみを使って彫り進めていきました。（立体感を出しやすいため）これまで木版画などで、三角刀や丸刀を直線的に使うことが多かったはずですので子どもたちにとっては登場シーンがほぼ無い切り出し刀を使うことは新鮮だったようです。初めはとっても恐れながら、どう動かせばいいのかコツを掴めないまま探り探りで作業を進めていました。回数を重ねる内に、見本の彫り跡と見比べたり、コツを掴んでスムーズに木を削る感覚を身につけたりと成長する姿が見られて嬉しかったです。いつもは友だちとわいわい交流しながら行う図工なので、間に10分の休憩をとっても1時間半ほど集中して彫り続けるのはなかなか難しく、力の入りすぎた指や肩は痛くなるし、集中力は途切れるので子どもたちは途中何度も心が折れかけていました。鉛筆で下描きしている時には細かいデザインを描いていた子も、彫っていく中で彫刻刀の幅より小さなデザインだと形が全てつぶれてしまうことに気づき、絵を大きくしたり数を減らしたりと工夫していました。①紙に下描き②板に写す③彫刻刀で彫る④絵の具で色付け⑤ニス塗り⑥箱の組み立てという工程で完成する思い

出ボックス。今は、全員が絵の具で色付けをされていて今日をめでに色付けも終盤にかかっています。箱の側面は、彫刻刀で模様を入れたり絵の具で色付けしたりすることを選択制にしたので、あえて木の雰囲気を残してニスを塗ることを選んだり、天板のデザインと模様や色が繋がるように色付けをすることを選んだりとそれぞれのこだわりで決めていました。色付けでは、絵の具セットに入っている筆ではなく面相筆を使ったので（昔は眉をかいたりする道具だと言うと驚いていました）彫った溝や細かい模様にまで繊細に色付けすることができます。面相筆の扱いに慣れてくると、画家のように筆を細かく動かして毛先を上手に使いこなしていました。彫刻刀を上手に扱えず思うような彫り跡を残せなかった子には、色のグラデーションで挽回できることを伝えました。便利な色「白」を、1回塗った色の上に軽くのせるだけで板の上でいい塩梅でなじんでくれます。（桜の花びらをピンクで塗った上から白を軽くのせるといった感じ）その感覚を身につけた子どもたちは、白をいいバランスで使っていました。筆に含ませる水野亮が多すぎると、板は木ですので水を吸って反ってしまいます。水分量にも気を配らないといけないのも慣れるまで時間がかかっていました。細かい工程を経て、これからニス塗りをして光沢を出し、多少の水には強い箱に仕上げていきます。一時は、本当に仕上がるのか？と不安になる（私が）時期もありましたが、子どもたちはねばり強く取り組むことができました。作品のテーマもそれぞれで「卒業」や「6ー0」「桜井谷」と文字や数字を入れる人、「桜の花びら」で卒業記念感を出す人、好きな風景や好きなスポーツを描く人、小学校生活の思い出を絵に表す人などいろんなアイディアが生まれました。個性あふれる作品を持ち帰るのを楽しみにしていただいね。

